子どもは遊びながら自然を体験し人間を知っていく

練馬区立田柄第二保育園園長　稲葉　穂

スマホやタブレットが子どもの生活の中に身近な存在となっている。子どもの育つ環境が急速に変化している中で、何を大切にして子どもと向き合うのか、元園児をなくした悲しい経験とともに保育園の現場で見える「子どもの育ち」と保育への思いについて、ひと・まち社の評価者でもある保育園園長の稲葉穂さんに執筆をお願いした。

子どもは、園庭を駆け回り、木に登ったり、ダンゴムシを探したり、どろんこ遊びをしたり、全身で自然を体験しながら遊んで、遊んで、遊び込みながら仲間を作り、人を知り、確実に美しく生き生きと成長している。そんな子ども達を日々見せられ心底感動している。

Ｋ君の死と藍染Ｔシャツ

今年の夏も暑かった。

酷暑の日の午後、Ｋ君（小学２年生）のお母様より電話がかかってきた。

涙声で「Ｋが昨日亡くなりました！お別れの会をしたいと思いますので参加していただけますか？」と。事故死かと思って尋ねると、１年生の夏休みが終わる頃から吐き気がし、頭が痛いと言うので、熱中症かと思い病院で治療を受けたが、脳腫瘍であった。１年間入退院を繰り返し数回手術をしたが、帰らぬ人になったということであった。１年生の１学期しか小学校に行っていないので、０歳児から保育園に入園したＫ君は保育園の思い出がほとんどのようで、電話がかかってきたのだと思った。

Ｋ君は、本園の子どもが入学する近くの小学校ではなく、ちょっと離れた区域から登園していたので、小学校も遠くＫ君の病気のことは全く知らなかった。

お別れの会には、２年前の卒園児が家族と共に大勢参列していた
棺のＫ君は、小さい顔になっていたが穏やかで微笑んでいるようであった
子育ては、良いことも厳しいこともあるが、８歳の子どもの死は辛すぎた
両親の悲しみは計り知れなく、顔を見ることができない程であった
卒園児とその両親、その他の弔問者、全員の参列者が泣いていた
保育園時代のＫ君のクラスメイトの親同士、子ども同士は抱き合って泣いていた
６年間に培われたＫ君を巡る子ども・保護者の絆の深さを感じた
Ｋ君の顔をじっと見る子どもたちの顔は高潔で崇高であった
友だちの死を悼む心が育っていて嬉しかった
思い出の映像には、保育園での様子と家族旅行の様子が流されていた
最後の写真は、両親と共ににこやかな笑顔の喜び溢れる卒園式の写真であった
旅行の写真では保育園で作った藍染のＴシャツを着たＫ君が笑っていた
藍染めのＴシャツはＫ君によく似合い、誇らしげに着ている感じだった
藍の葉っぱをミキサーにかけて、懸命にＴシャツに染めていたＫ君の姿が思い出された

お別れの会の参列者の卒園児が数名、保育園で作った藍染のＴシャツを着ていたのでびっくりした。体が大きくなったので、パツパツであった。種から蒔いて育てた藍で染めたＴシャツ、自然のものは色落ちもしないと聞いたが、その通りであった。

「Ｋ君に愛された藍染Ｔシャツ」と共に保育園の思い出に、５歳児クラスで作った藍染Ｔシャツの存在があることに喜びを感じた。世界に一つだけ、自分だけの藍染Ｔシャ

藍の葉

ツは子ども達の宝物になっていた。キャラクターのシャツの方が人気があるかと思ったが、自分達が作った藍染の手作りのＴシャツに、思っていたより子ども達は愛着を持ち、着れなくなっても大切にとってあるとのことであった。

今年も５歳児クラスは恒例の藍染Ｔシャツを作った。運動会と卒園遠足に着用する。藍を育てる行程は長く、花が咲く前の新緑の葉で染めなければならない。作業は大変で市販の染粉を使いたくなった時もあったが、Ｋ君の死は手作りのすばらしさを改めて教えてくれた。来年度も引き続き藍染めは続けることを職員と確認した。藍は草なので染めた時は緑色をしているが、空気に触れた部分から青色に変化し、唯一無二の美しさになる。青色に変わっていく様子は不思議と言うか神秘的である。

藍染め

スマホ社会から子どもを守る

AI 時代が到来しても人を育てるには、「自然」と「人」は不可欠である。

今、乳幼児から小中学生、大人に至るまで、取り付かれたかのようにハマっているスマホやタブレット。平面画面の文字と記号、映像のコミュニケーションは、人類が何十万年もかけて築き上げてきた温もりと思いやりのある社会システムを土台から崩し始めている。

いつでもどこでも多機能で簡単に操作できるスマホやタブレットの乳幼児期の使用は、子どもの人間らしい心を育む前頭葉の発達を阻み、発達への多面的な悪影響が出ている。スマホやゲーム機と向き合う時間が増えると、人間との関わりが減り、ネット依存になり健全な発達が蝕まれ悲惨な結果になる場合も少なくない。

乳幼児期からスマホ・タブレットを与えられた子どもたちの運動機能、目の発達を阻害し、親もスマホ片手の子育てを行い愛着形成に悪影響を与えている。

子どもは様々な生き物に出会いながら、生命の神秘やはかなさを感じたり、季節の移ろいの中で自然と触れ合い、感性を豊かにしていく。自然と出会い、感動する体験は、自然に対する畏敬の念、豊かな感性を育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを培う基盤となる。自然の環境の中で、子どもたちは、草の芽や小さな虫をみつけては、発見の喜びに感嘆の声をあげる。視覚、聴覚、味覚、触覚、臭覚の五感はこのようなとりわけ外遊びの世界で育っていく。発見は、感動に支えられた学習となり、子ども時代の原体験として、その後の人生に大きく影響する。

スマホ社会から子どもを守るには、自然の中での遊びの復活しかないように思える。

未来をつくり出す力を養う

『保育所保育指針』の保育の目標に「保育所の保育は、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力を培うために行う」と謳ってある。未来をつくり出す力、つまり「生きる力」を培うには、自然の大きさ、美しさ、不思議等を直接体験することが大事である。その自然と触れ合う経験を通して、優しさ、好奇心、思考力、表現力等を培っている。

Ｋ君の死はとても悲しいことであったが、家族旅行で藍染めのＴシャツを着て最高の笑顔を見せてくれていたＫ君や、保育園で作った藍染Ｔシャツを何時までも大事に着ている卒園児を見て、「手作り」「自然」「友だちとの関わり」「手ごたえのある学習」「自由な環境」等は、保育のポイントであることを再確認した。

藍染めの他にも、米作り、野菜作り、小動物の世話等を保育に取り入れている。米作りでは、田植え、稲刈り、脱穀までを経験している。食育に力を入れ、５歳児クラスは炊飯をして、毎日、自分でご飯をよそって食べている。

園庭の花壇や畑では、四季折々の花や野菜を育てている。収穫をして食育で具材を料理する経験は最高の喜びとなっているが、４歳児が育てていたトマトのまだ青く小さい実を２歳児が全部摘み取ってしまったり、練馬大根の葉ばかりが大きく茂り人参のような大根を収穫してがっかりしたことなども経験し、自然と交わる喜び、好奇心、厳しさなどを味わっている。

これらを伝えられる保育者になるための研鑽を怠らないようにしたいと思っている。